「おしゃれ白書‘９７」にみる

現代女性の髪色（かみいろ）観

若者は茶髪が当たり前の時代に
黒髪へのこだわりの消失？

1997/11/25

ポーラ文化研究所
村澤・高谷

はじめに

安室奈美恵さんがショートヘアにしたと思ったら、電撃結婚。茶髪のシンボリックな存在の変化とともに、茶髪に対する意識が変り黒髪に戻るようなことが話題とされているが、そうだろうか。最新のデータから髪の毛の色に対する意識、すなわち髪色観を探ってみた。

今回のレポートで使用している調査項目は「茶髪」が話題になりはじめたころ、1990年代に入ってから「おしゃれ白書」に追加したもので、今年で３回目、足掛け６年になる。

そういえば最初のころは茶髪に対する賛否両論が紙面を賑わしていたことを思い出す。「茶髪」という言葉も途中、1994年ごろから使われはじめた言葉である。当時の新聞にはわざわざ「チャバツ」あるいは「ちゃばつ」と読みがなが漢字の後ろにつけられていた。今では当たり前の茶髪。茶髪と呼ぶ以前はなんと呼んでいたのか、おそらく思い出せないのではないだろうか。それほどまでに、髪の毛の色に対する私たちの言葉や意識は変わってしまったのだろうか。

今年調査を行なった「おしゃれ白書97」はポーラ文化研究所が1979年以来継続している調査で、３年毎に実施している。調査概要は以下の通りとなる。

「おしゃれ白書‘９７」調査概要

調査地域：首都圏３０キロ圏内

調査対象者（数）：15歳からから65歳までの女性、1150人

サンプルデザイン（単位：人）

15～18歳:高校生	75
19～23歳	150
24～29歳	150
30～34歳	175
35～39歳	100
40～44歳	100
45～49歳	100
50～54歳	100
55～59歳	100
60～64歳	100

調査対象抽出法：エリアサンプリング法

調査方法：戸別訪問面接聴取法および留置法の併用

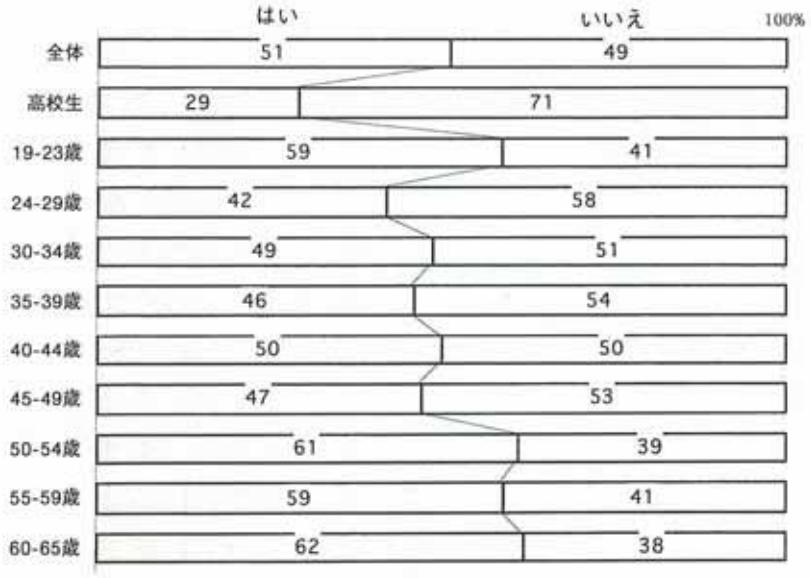
調査期間：１９９７年６月

1．調査結果

1.1.「染毛している人」は？――２人に１人が染める時代

「染毛している人」を、最新のデータを「おしゃれ白書‘９７」より見てみると（グラフ１）、全体では51％の人が染毛、すなわち毛を染めている。二人に一人が染めていることになる。年齢別に見ると、高校生が29％と一番低い。一番高いのは60-65歳で62％で、50-54歳61％、55-59歳59％、19-23歳59％と続く。残りの20代半ばから40代までの女性はほぼ40％台の結果であった。

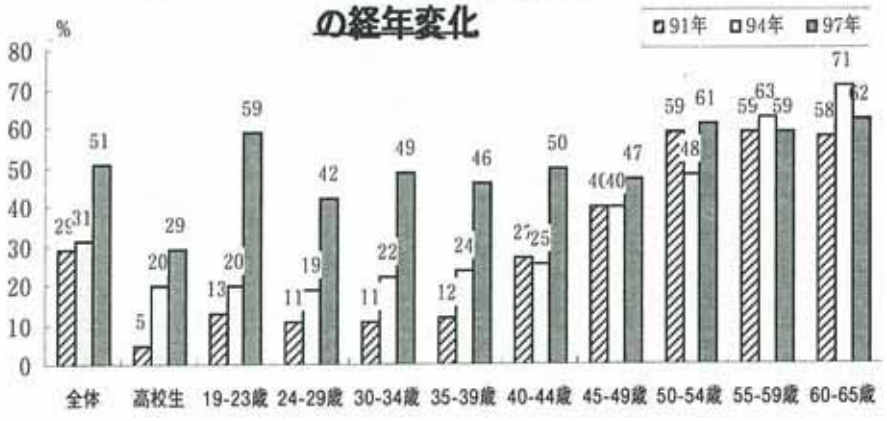
グラフ１　染毛している人



「おしゃれ白書‘９７」より

以上が最新の結果であるが、それ以前はどうであっただろうか。1991年以降、1994年、今年（1997年）と比べてみた（グラフ２）。1991年「染毛していた」女性は全体では29％。高校生で５％、20代30代では10数％と低い。それに対して、50代以上では60％近い結果である。1994年の結果は、40歳以下では1991年のほぼ２倍近い伸びとなって増えているが、40代後半以上では多少の増減はあるが、明確な方向性は見られない。３回の調査全体、すなわち６年間の変化を見ると、高校生から40代前半までは２倍前後の増加が見られる。特に19－23歳では1994年の３倍（1991年の４倍以上）に増加している。それに対して、40代後半以上は大きな変化はなく、50代後半以上では1994年よりもむしろ減る傾向さえ見られる。

グラフ２　「染毛している人」の経年変化



「おしゃれ白書91　94　97」より

いうまでもなく、20代30代の染毛はおしゃれ染め、いわゆる茶髪系の染めであろう。19－23歳では３年前の３倍増となっているが、この変化に大きな影響を与えたものに「アムラー現象」の発信元となった安室奈美恵さんの存在は無視することができない。
また、高校生が低いのは彼女たちが校則などで規制されているためと思われる。

1.2.「白髪は染めたほうがよい」か？―――白髪もすてき！

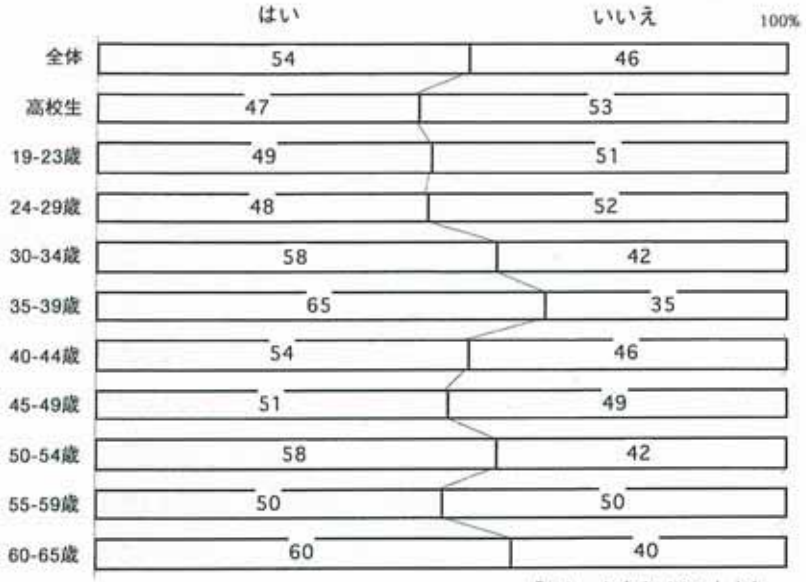
若い女性の染毛率は1990年代に入って大きく増加したが、その一方で40代後半以上の年齢の女性は大きな変化が見られないようである。そうだろうか。そこで、「老いを感じさせる白髪は染めたほうがよい」と思うかどうかを聞いてみた。1997年の結果はグラフ３となる。

全体では、半数以上の54％が「白髪を染めたほうがよい」と考えている。年齢別に見ると、30代後半と、60代前半が60％を越えて高めであるが、年齢別に見た特徴は明確でない。

では1991年と比較するとどうだろうか。全体では1991年の65％から11％減っているが、前回の1994年よりは増えている。年齢別に見てもほぼ同様の傾向で、多くの年代で1991年よりも低くはなっているが、前回よりは高くなっていてＶ字型を示している。

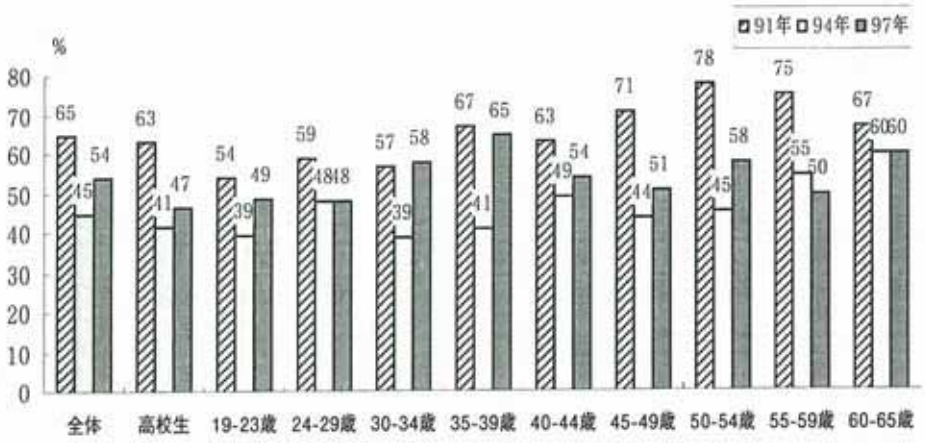
そのなかで減少が大きいのは40代後半から、５０代後半にかけてである。この年代では20％以上の減少である。彼女たちの多くは白髪が増えるという現実に直面しながら、意識としては白髪は必ずしも染めなくてよい、という考え方を取り入れはじめているように思われる。「白髪は染めなければ」という人が減りはじめているようである。

グラフ３　老いを感じさせる白髪は染めたほうがよい



「おしゃれ白書‘９７」より

グラフ４　「老いを感じさせる白髪は染めたほうがよい」の経年変化



「おしゃれ白書91　94　97」より

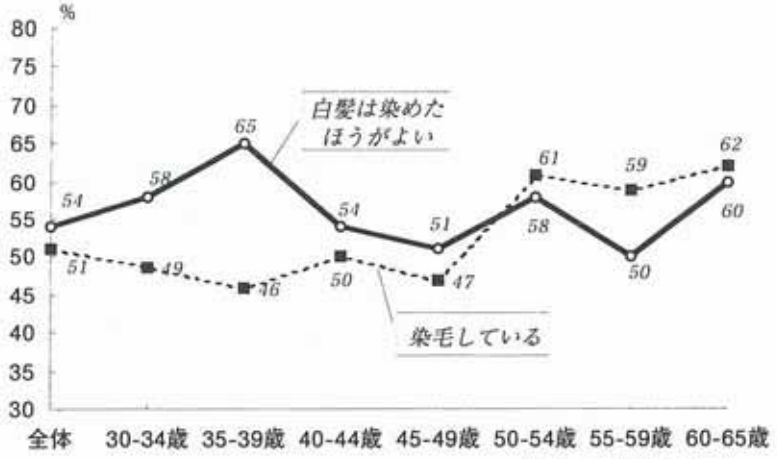
1.3.「毛染め意識と実際の比較」？―――おしゃれ染めの時代に！

40代後半以上の女性の白髪に対する意識が大きく変化しはじめていることがわかったが、意識と実際の違いはどうだろうか。比較してみた。グラフ５のように、現実として白髪が生えてくる年齢を見るために３０歳未満ははずしているが、30代40代では「老いを感じさせる白髪は染めた方がよい」という回答が「染毛している」を上回っている。一方、５０代以上では、「染毛している」が「老いを感じさせる白髪は染めたほうがよい」を上回っている。この違いは何を意味するのだろうか。

いいかえると、50歳以上で「白髪は染めなくてよい」と思いながら髪の毛を「染めている人」が数％から９％いることの意味である。

それは必ずしも白髪を若さを表わす黒髪に染めるのではなく、茶髪を含めた紫など、カラー染めにしている人たちだと考えられないだろうか。いわば、オシャレ染めである。確かに身の回りを見ても、さまざまな髪の毛の色の女性が増えている。

グラフ５　毛染め意識と実際の比較



「おしゃれ白書97」より

1.3.「茶髪意識」は？

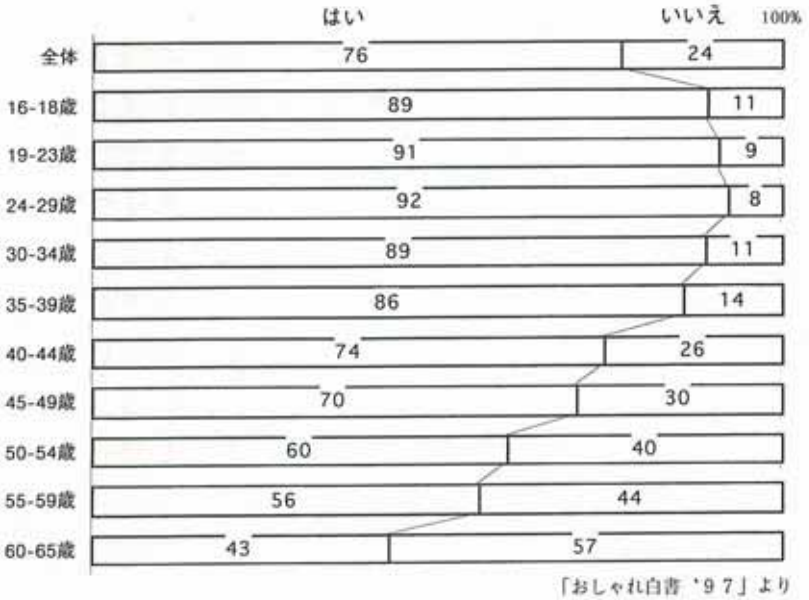
このレポートの最後に、茶髪に対する意識の調査結果を見てみたい。

グラフ６に示すように、1997年のデータでは、全体で76％の女性が茶髪を肯定している。４人に３人の割合である。

年齢別では、高校生から30代前半まででは、90％前後、肯定している。否定はほぼ10％で、１０人に１人の割合となる。一方、50歳以上では肯定する人は半数近くまで下がり、60代では43％と半数を切っている。

茶髪に対する意識は年齢によって、はっきり分かれる結果となった。

グラフ６　茶髪は似合えばやってもよい



「おしゃれ白書 '９７」より

2．考察

以上のような結果から、髪の毛の色に対する意識の変化、髪色観を考えてみたい。

黒からの解放

1991年以降の、特に40代前半以下の毛染め率の変化には目を見張るものがある。実際にいろいろと観察して見ると、茶髪（という言葉は最初から使われたわけではないが）がブームになりはじめたころはまだ一部の人で、いわゆる明るい茶色が目立った印象がある。しかし、最近ははっきりと染めていることがわかる人だけでなく、部分的に微妙なグリーン（黄色と青を混ぜて）したり、遠目では気が付かなくても近づいてみると地毛の色ではない色をのせていたりなどバリエーションがたいへん増えているように思える。30代までは90％ほどの人が「茶髪は似合えばやってもよい」と思っているという回答を見ると、必ずしも地毛の色としての黒髪にこだわらなくてよいと思っている人が増えてきている、と解釈できよう。

茶髪と一言で呼んでも、実際に染めた色はすでに述べたようにかなり幅広い。いわゆる脱色した茶色（ブラウン）からイエロー、オレンジ、レッド、クリーム色、金髪など髪の毛の色としては存在するものから、白、ブルー、グリーン、パープルまで従来は考えられなかった色まで驚くほど色幅は広がっている。

この色の選択という点では、その自由度は髪の色にとどまらず、カラーコンタクトレンズにまでおよんでいる。視力の矯正のためでなく、おしゃれとして、ブルー、クレー、グリーンなどのレンズが使用され、ある推計ではここ数年、毎年何倍にも拡大したとも聞く。日本人は黒い髪で黒い瞳という固定観念＝こだわりは破られつつあるようだ。

この従来の価値観にこだわらなくなったという傾向は先ほどの40代前半以下に限らない。白髪を自分の問題としてかかえる40代後半以上の年代にも、見られているようだ。すなわち、白髪は恥ずかしいもの、黒く染めるべきものという考え方にこだわりがない人が増えている。紫のような黒以外の色に染めたり、あるいは白は白のままでいいという人も出てきているように思われる。

髪の色の文化の違い

歴史を振り返ってみると、日本人の黒髪に対する平安時代以降のこだわりは、今から思えば異常であった。少なくとも顔やからだなど全体の美を考えたとき、伝統的に髪に対する意識だけが突出していたことは事実である。黒髪こそ美であり、若さであり、「緑の黒髪」「烏羽の玉藻」「烏の濡れ羽色」「青糸の髪」「翡翠の髪状（かんざし）」などと称えていた。いわば黒い髪がすべてという文化が千年近く存在したのである。したがって、中学、高校で髪の毛の色が黒から外れていると、染めていない、生まれつきの色であることを証明しないと容認されないという歪んだ校則が生まれてしまう。

最近の茶髪はどうであろうか。ヨーロッパでは古来、髪の毛の色に象徴的な解釈がほどこされ、持ち主と結び付けられてきた。金髪は太陽、金と結びつくので高貴なもの、ブルーネットは真摯で情が深いとみなされた一方、赤毛は望ましくない色とされ、忌み嫌われた。旧約聖書のカイン、福音書のユダの例を待つまでもなく、もっと身近な例ではコナン・ドイルの『赤毛連盟』、ルナールの『にんじん』、L．M．モンゴメリ『赤毛のアン』などに共通して、除け者、癇癪持ちという意味が背景にあった。そのような髪の文化を背負っているから、白人系の女性は優位性が高い色、ブロンドに染めたがるわけである。

このように髪の毛の色に対する文化の違いは大きく存在するが、なぜいま染めるのだろうか。よくいわれている茶髪にした理由は、「黒いと重いから」「軽く、明るい印象を出したいから」「日焼けした肌に合わないから」という感覚的なもの。ほかに周りとの関係で「皆と同じでは嫌だから」「イメージを変えたい」、「ファッションの選択幅が広がる」などがある。

いずれにしても、見た目へのこだわり、視覚的感覚的な理由であり、色の象徴的な意味などはまったくない。もともと、私たちは黒髪以外の髪の色の文化をもたないから、勝手ができるのだろう。

黒い髪の文化圏に住む人にとって、黒一辺倒でないという自由度を得たようだ。いいかえれば、髪は「まっすぐで色は黒」というこだわりから解放され、自分で髪の毛の色を選ぶ時代となりつつある、といえよう。